

新府城跡(韮崎市)

築城年代:天正9年(1581年)、築城者:武田勝頼

まず、駐車場のある北東側の「東出構え」→「西出構え」→「西堀」の西側にある搦手(乾門)→「二之丸」と進んでみる



正面は南側から見た新府城跡



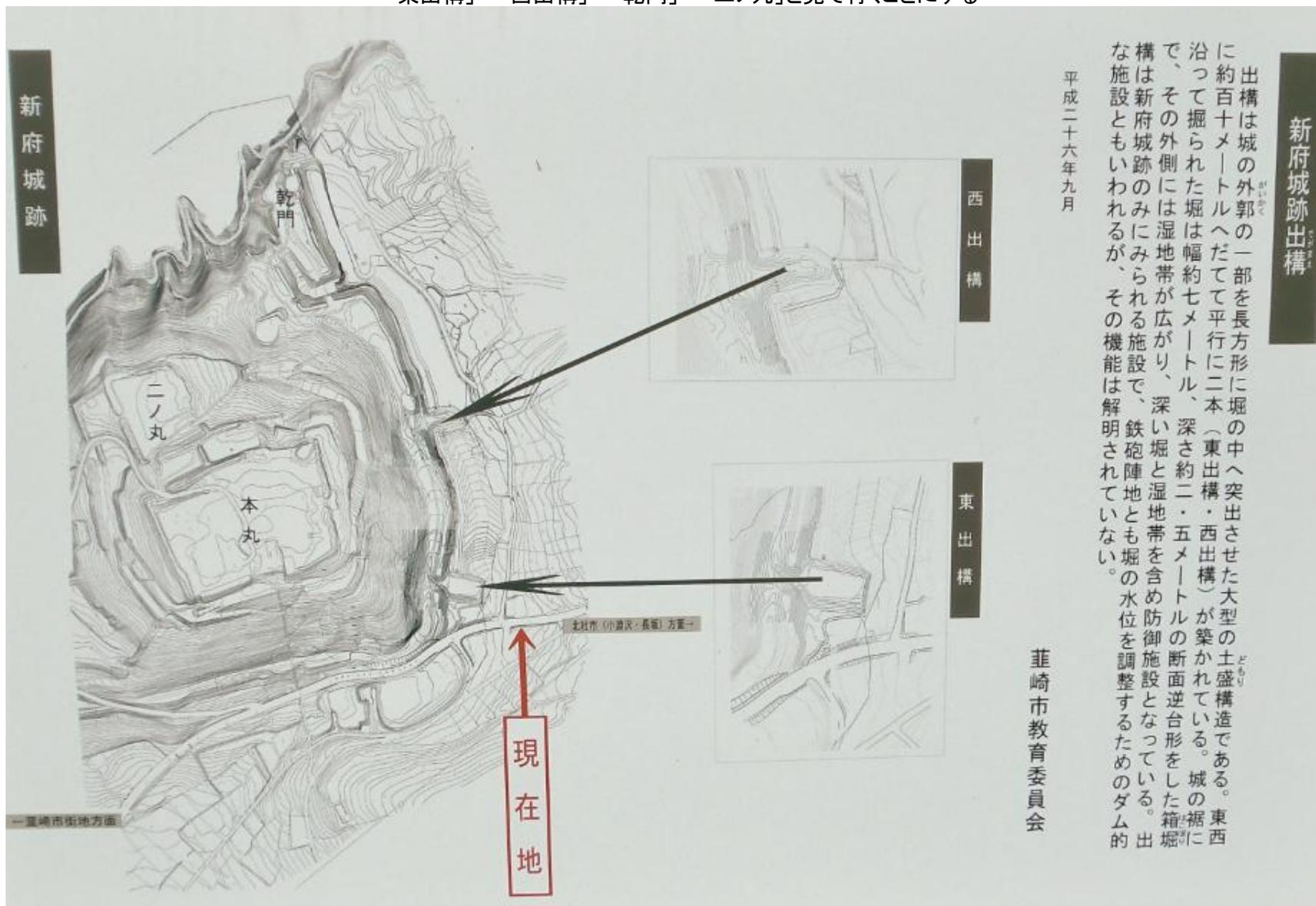
アップで見る



これは北東側の駐車場から見た新府城跡



「東出構」→「西出構」→「乾門」→「二ノ丸」と見て行くことにする



新府城跡出構

出構は城の外郭の一部を長方形に堀の中へ突出させた大型の土盛構造である。東西に約百メートルへだてて平行に二本（東出構・西出構）が築かれている。城の堀に沿って掘られた堀は幅約七メートル、深さ約二・五メートルの断面逆台形をした箱堀で、その外側には湿地帯が広がり、深い堀と湿地帯を含め防御施設となっている。出構は新府城跡のみにみられる施設で、鉄砲陣地とも堀の水位を調整するためのダム的な施設ともいわれるが、その機能は解明されていない。

平成二十六年九月

菲崎市教育委員会

さて、左手が「東出構」/右手前方には「西出構」が見える



「東出構」、「西出構」の周りは湿地帯で城郭(帯郭)との間には堀(東堀、中堀、西堀)が巡っている



「東出構」



北側から見たところ



帯郭から北方向に「東出構」を見たところ



「東出構」



「東出構」から西方向に「西出構」を見たところ



これは北側から新府城跡を見たところ



湿地帯であったところに説明板がある



新府城跡東出構と西出構の間の堀

天正9年(1581)に築城された新府城は、北から東の山裾に土塁と堀をめぐらし、特に北側の堀中には2箇所に出構(東出構・西出構)と呼ばれる土手状の張り出しを構築している。発掘調査以前では、堀跡とされる一帯は、近世の絵図によって堀の存在は想定できるものの、範囲や形態等は不明であった。西出構と東出構の間には、堀の痕跡とみられる幅5~6mほどの細長い区画が部分的に存在し一部に水路が流れており、発掘調査の結果、耕作土の下から埋没した堀跡が発見された。

新たに確認された堀の遺構は、西出構と東出構の約120mの間に、3箇所折れをもつて構築されており、幅は6~7m、堀底までおよそ2m前後の深さがある。堀は両側が急傾斜となり、北側上半部の傾斜は緩く20~30度、下半部で45度前後の角度をもつ。石積などの構造物はなく、箱堀で、断面は2段の逆台形をしている。この堀の北側には、深田状の湿地帯が広がっていたものと推定され、それらを含めて新府城北側の防御施設としたと考えられる。

整備事業では、発見された堀跡遺構を保護したのち、その上に深い堀の範囲がわかるように復元を行っている。



発掘調査前航空写真(北西上空から)



堀跡平面図



発掘調査で確認された逆台形の深い堀跡

平成22年3月 文化庁・山梨県教育委員会・葦崎市教育委員会

左手を見たところ/「東出構」が見える



右手を見たところ/「西出構」が見える



これが「西出構」



「西出構」付近から東方向に「東出構」を見たところ



北側から見た「西出構」



帯郭から北方向に「西出構」を見たところ



右手を見たところ/「東出構」方向へ帯郭が続く



振り返って反対方向(西方向)の帯郭を見たところ/中堀、湿地帯側には並行して土塁が築かれているのが見てとれる



「西出構」



「西出構」から東方向に「東出構」を見たところ/右手には東堀が見てとれる



振り返って「西出構」から西方向を見たところ/左手には中堀が見てとれる/前方に説明板が見える



アップで見る



これがその説明板



東堀、中堀とも「折れ」があり、堀に並行している土塁も同じ箇所で「折れ」がある

しんぶじょうあときたがわほり
新府城跡北側の堀



新府城跡の北側山裾には外側に向って、帯郭・土塁・出溝・堀などの諸施設が設けられているが、西堀(水堀)以外の堀跡は、周辺の湧水を水源とした水田が開かれるなど、廃城後の土地利用による改変で旧状は不明であった。

環境整備事業にともなう発掘調査により、中堀では、山際から埋もれていた深い堀跡が確認された。この発見された堀は、断面が逆台形状となる箱堀と推定され、西堀の東端から始まり、堀幅は6~7m、深さは2.5m前後で、西出溝の手前で閉じている。また堀の北側には堀と平行する低い土手状の高まりが見られる。堀は直線ではなく2箇所折れをもった構造で、城側の土塁も同じ箇所折れをもつ。

西出溝と東出溝の間にも、発掘調査によって同様な深い堀跡が発見された。堀は、城側の土塁に沿って3箇所の折れがみられる。この堀は、西出溝の東側と東出溝の西側の両方で閉じている。東出溝の東側では深い堀は確認できていない。今回の調査によって、築城時には中堀・東堀の山際は幅約6~7m、深さ約2.5mの深い堀と、その北側は幅30m前後の湿地帯がセットになって城の北側を防御していたことが明らかとなった。そのため整備では深い堀跡と浅い湿地帯の形状を復元し、新府城の使用時の状況を伝えることを主眼とした。

西堀(水堀)は、発掘調査を実施せずに現状のままを樹木の間伐と植栽などの修景を行った。

平成23年3月 文化庁・山梨県教育委員会・韮崎市教育委員会

新府城・武田勝頼関連歴史年表

新府城・武田勝頼関連歴史年表

新府城は、武田勝頼が1570年に築いた。この城は、武田氏の領地である新府にあり、武田勝頼が城主として統治した。この城は、武田氏の領地である新府にあり、武田勝頼が城主として統治した。

年	出来事
1570	武田勝頼が新府城を築く。
1571	武田勝頼が新府城を築く。
1572	武田勝頼が新府城を築く。
1573	武田勝頼が新府城を築く。
1574	武田勝頼が新府城を築く。
1575	武田勝頼が新府城を築く。
1576	武田勝頼が新府城を築く。
1577	武田勝頼が新府城を築く。
1578	武田勝頼が新府城を築く。
1579	武田勝頼が新府城を築く。
1580	武田勝頼が新府城を築く。
1581	武田勝頼が新府城を築く。
1582	武田勝頼が新府城を築く。
1583	武田勝頼が新府城を築く。
1584	武田勝頼が新府城を築く。
1585	武田勝頼が新府城を築く。
1586	武田勝頼が新府城を築く。
1587	武田勝頼が新府城を築く。
1588	武田勝頼が新府城を築く。
1589	武田勝頼が新府城を築く。
1590	武田勝頼が新府城を築く。
1591	武田勝頼が新府城を築く。
1592	武田勝頼が新府城を築く。
1593	武田勝頼が新府城を築く。
1594	武田勝頼が新府城を築く。
1595	武田勝頼が新府城を築く。
1596	武田勝頼が新府城を築く。
1597	武田勝頼が新府城を築く。
1598	武田勝頼が新府城を築く。
1599	武田勝頼が新府城を築く。
1600	武田勝頼が新府城を築く。



新府城の位置



新府城の風景

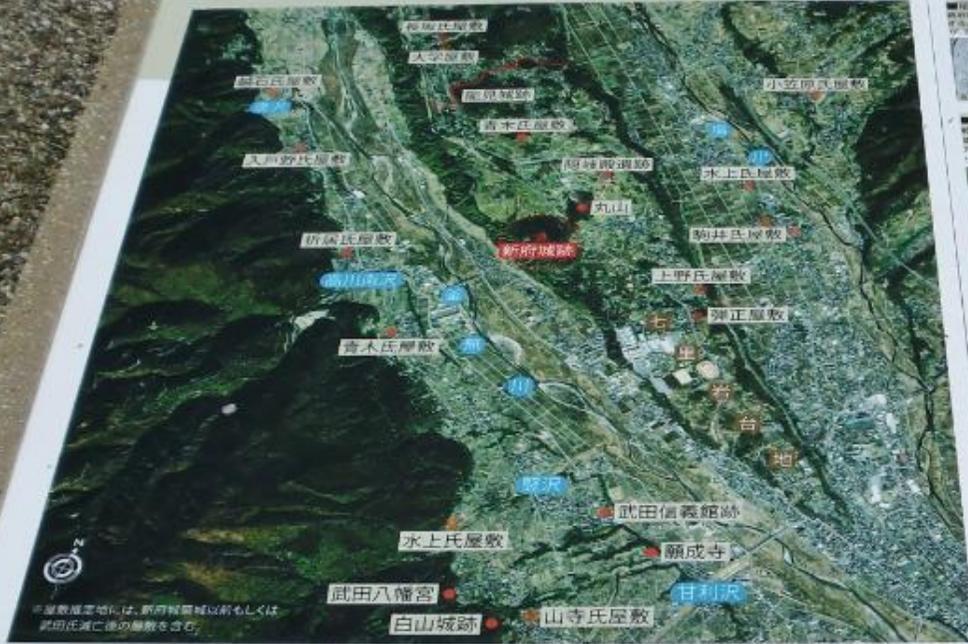


新府城の建物

こんな説明板もあった



新府城跡の景観と遺構



平家屋敷等地には、新府城築城以前もしくは武田氏滅亡後の屋敷もみえる。

■新府城跡
新府城跡は、新府城跡として知られ、その中心には新府城跡の遺構が点在している。新府城跡は、新府城跡として知られ、その中心には新府城跡の遺構が点在している。

■新府城跡遺構
新府城跡の遺構は、新府城跡の遺構として知られ、その中心には新府城跡の遺構が点在している。新府城跡の遺構は、新府城跡の遺構として知られ、その中心には新府城跡の遺構が点在している。

■家臣団の屋敷跡
江戸時代に編み込まれた「新府城跡」に点在している家臣団の屋敷跡である。相模には土塁などの遺構が残っている。

■武田八幡宮
甲斐武田氏の地祖武田信義が創建したと伝えられ、現在の本殿は武田信玄が再建したものである。また、武田勝頼の夫人が武田家の再興を願う祈願文を奉納した神札として知られている。

天正9年に武田氏の当主武田勝頼が新たに府中の中核として築造した新府城は、韮崎市を貫通する釜無川と塩川の2大河川の開削によって形作られた七里岩台地上にあり、その西崖を活かした要害の地に築城されている。

主郭(本丸)からは、富士山・甲府盆地・八ヶ岳が一望でき、諏訪・佐久・駿河等への交通網を掌握しやすい立地にある。また、本城の北方には能見城があり、北の守りの要となっている。釜無川をはさんだ対岸には、甲斐武田氏の初代にあたる武田信義が治めた地域が広がり、その歴史を示す願成寺の木造阿彌陀如来及び両脇侍像、武田八幡宮、白山城跡や武田信義館跡などの文化遺産が点在している。新府城を中心とした新たな府中の様子は未解明な点が多いが、家臣団の屋敷位置の描かれた絵図の存在や屋敷地の伝承を持つ土塁跡などの遺跡が確認されている。新府城跡とその周辺には、本城が交通・軍事・政治・経済などの様々な条件のもとに築造された経緯を知り得る良好な歴史的景観が保たれている。

■名古屋市蓬左文庫所蔵「葦崎城図」
電徳徳川家の百蔵書のなかに伝えられた絵図のひとつ、七里岩台地を擁し、新府城の遺構図を中心に、周辺に名称の入った四角の家臣屋敷が表現されている。朱書きの道や、北方には能見城の防壁も描き込まれている。



■新府城跡の現状遺構

切り盛りによる造成事業によって
縄張りされた新府城には、土塁や堀
や郭などの遺構が明瞭に確認できる。



井戸



乾門(桐形虎口)



丸馬出



三日月堀



西三の丸



東三の丸



本丸



二の丸



帯郭



大手樹形虎口

拡大版

■新府城跡の主要な遺構



拡大版

■名古屋市蓬左文庫所蔵「^{ほろさびんこ}葦崎城図」

^{おとへ徳川}尾張徳川家の旧蔵書のなかに伝えられた絵図のひとつ。七里岩台地を描き、新府城の^{しんぷ}縄張図を中心に、周辺に名称の入った四角の家臣屋敷が表現されている。朱書きの道や、北方には^{のぞみ}能見城の防塁も描き込まれている。



■新府城跡の位置づけ

新府城跡の本丸と二の丸の空間構成は、武田氏館（躰躰ヶ・
 崎館）跡の方形の堀と土塁で囲まれた主郭と西曲輪の配置
 に類似した形態をなしており、新府城は武田氏の守護館を踏
 襲して造営されたと考えられる。当時の文献史料においても、
 「新御館」「新館」「御館・葎崎」「館」と記されており、軍事的施設
 という認識以上に、館を意識した城郭であったことが窺える。

館は領国支配の中心的な役割を果たし、政権を執行する
 ための重要かつ公的な場所である。新府城は、単に軍事的目
 的のためだけに築城されたものではなく、甲斐を中心に信
 濃・駿河・遠江・三河・西上野・美濃・飛騨に広がる武田領国を
 統治する政庁＝館としてつくられたものである。

平成24年3月 文化庁・山梨県教育委員会・葎崎市教育委員会

そこから東方向に中堀を見たところ



これは西堀



右手を見たところ/西堀が更に西方向に延びている



その先にまた説明板が見える



ここは「乾門」への土橋



新 府 城 跡

整備鳥瞰イメージ図



新府城は、天正9(1581)年に武田勝頼によって築城された。城は未完成であったが、同年の9月頃には友好諸国に築城が報じられ、12月24日に躰躰ヶ崎館(武田氏館跡 山梨県甲府市)からの移転が行われた。しかし、天正10年3月3日、勝頼は織田軍侵攻を目前にして自ら城に火を放ち退去し、3月11日に田野(山梨県甲州市)において、夫人と息子信勝ともに自害し、武田氏は滅亡した。その後、同年に徳川氏と北条氏による甲斐国争奪をめぐる天正壬午の戦いがおこり、徳川家康は新府城を本陣として再利用した。

新府城が立地する七里岩は、八ヶ岳の山体崩壊にともなう岩屑流が、西と東側を流れる釜無川と塩川の侵食によって形成された台地で、西側の断崖絶壁は葎崎から長野県の葛木(諏訪郡富士見町)まで約30km続き、奇観を呈している。台地上には、100を越す「流れ山」と呼ばれる小高い丘・小山があり、新府城は七里岩台地南端の標高約524mの「西の森」と呼ばれた小山に築かれ、西側は釜無川をのぞむ急崖となっている。

城は土の切り盛りによって造成が行われ、山頂の本丸を中心に、西に二の丸、南に西三の丸・東三の丸の大きな郭が配され、北から東にかけての山裾には堀と土塁で防御された帯郭がめぐり、南端には大手樹形・丸馬出・三日月堀、北西端には搦手があり、全山にわたって諸施設が配置されている。搦手の郭は東西100m、南北25mの東西方向に細長い長方形をしており北側には水堀と土塁、東から南側にかけては空堀、西側は比高差90m程の七里岩の断崖となっている。城の北西隅につくられている乾門は、西側は七里岩の崖、東側が水堀でこの間を土橋でわたる構造で、大手と同様に内側が大きく、外側が小さい土塁によって囲まれたやや変則的な形の罫形虎口で、樹形内部空間は東西約13m、南北約12mの広さがあり、外側門(一の門)は北西角、内側門(二の門)は南東隅寄りに設けられている。



昭和23(1948)年の新府城跡(米軍撮影航空写真、一部改変)

整備鳥瞰イメージ図



そこから東方向を見たところ



右手の西堀を土橋から見たところ



振り返って西方向を見たところ/七里岩の断崖絶壁となっている



新府城跡西側

東側を塩川に、西側を釜無川に浸食された七里岩台地上に築かれた新府城跡は、急な崖を城壁に、その東西を南流する両河川を外堀とした、天然の要害である。

西側を流れる釜無川の右岸一帯は、武川衆と呼ばれる地域武士団の根拠地(武川筋)である。その一角に位置する韮崎市神山町武田は、平安時代末に甲斐源氏武田氏の始祖である武田信義が館を構えた地であった。

諏訪へ通じる甲斐と信濃の国境地域の守衛にあたった武川衆は、文化11年(1814)成立の江戸時代の地誌『甲斐国志』に「新府ニテ勝頼謀略アリテ面々ノ小屋ニ引入アルペシトノ儀ナリ、各々其意ヲ守リシカドモ其謀略相違セシ故ニ武川衆ニハ勝頼ノ供シタル人ナシト」とあるように、新府城の防衛にも関わっていたことが推測されるが、織田軍の侵攻が急激であったため、新府落城時には、動きが取れなかったようである。武田氏滅亡後、織田信長の死に端を発した天正壬午の戦いでは、武川衆は徳川家康の配下に属し、家康の本陣となった新府城に対して若神子城以北に陣を構えた北条氏直の軍と最前線で対峙し戦功をあげている。



七里岩台地と釜無川 (南側上空から)



北西側上空から見た新府城跡

平成23年3月

文化庁・山梨県教育委員会・韮崎市教育委員会

さて、ここが搦手の郭への入口である乾門柵形虎口



新府城跡乾門 櫛形虎口

城の北西隅につくられたこの虎口は、西側の七里岩の崖と東側に広がる水堀の間を土橋によってわたる構造で、入り口側が低く、奥側が高い土塁に囲まれた不整形をした櫛形虎口となっている。櫛形内部空間は、東西13m、南北12mの広さがある。

入り口側の低い土塁に挟まれた一之門は北西角、奥側の高い土塁に挟まれた二之門は南東隅寄りに設けられている。櫛形内部で折れをもつて入る形態となっており、表面は土のままですを敷き詰めたような痕跡は認められていない。

一之門跡では、幅約1.55mの間隔で直径45cm前後の円形の柱穴が2個検出された(柱穴の中心で測る柱の間隔は約2m)。二之門跡の調査では、左右の土塁際に3個ずつ、合計6個の礎石が確認された。左右対称に並べられた礎石からもとめられる間隔は2.5m、奥行きは2.8mあり、礎石は一辺40~60cmと大きさの異なる自然石で、入り口側から大・小・中の大きさに並べられ、その間は地覆石が配されている。

本整備事業では、発見した門跡遺構を埋設して保護したのち、その上に一之門は柱穴の位置表示、二之門は礎石の復元表示を行っている。



乾門 櫛形虎口平面図



整備前の乾門 櫛形虎口 (西側から)



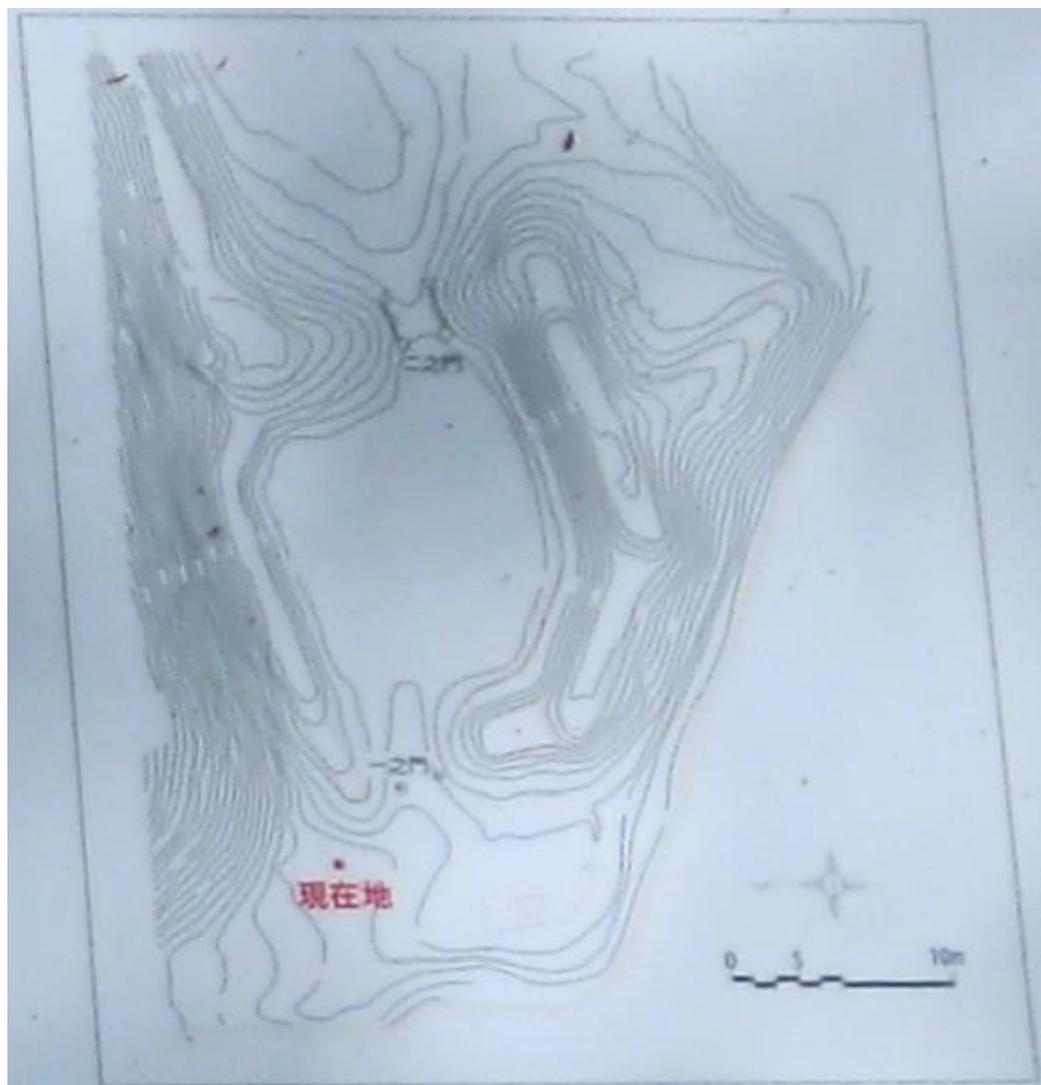
一之門の柱穴 (西側から)



二之門の礎石 (西側から)

虎門は従来大手と呼ばれてきた。江戸時代の地誌『甲斐国志』では新府城跡の南端に位置した門を大手と記している。一般的には、大手に対する形で北西隅にあるこの虎口を大手と称していた。しかし、城の裏門という意味合いをもつ大手の呼称は門の機能を限定してしまうことから、本整備事業では、本丸からの方位を冠して、乾(北西)門とした。

平成28年2月 文化庁・山梨県教育委員会・韮崎市教育委員会



乾門 樹形虎口平面図

柵形内部で折れをもった形態で、手前には一之門の柱穴の位置表示が見える/西側から見たところ/柵形の向こうが搦手の郭



柵形に入って西側から搦手の郭方向を見たところ/二之門の礎石の復元表示が見える



土塁の上から二之門の礎石の復元表示を見たところ/前方には西堀に沿って柵形虎口から延びる搦手の郭の土塁が見てとれる



二之門の礎石の復元表示を見たところ/手前から大中小の礎石があり、その間には地覆石が配されている/前方は搦手の郭



新府城跡乾門 二之門

二之門跡からは、礎石に伴い散在した状態で焼土や炭化材、角釘等が出土し、門が燃えて倒壊したことが明らかとなった。また、門跡（礎石）に取り付く左右の土塁は、礎石手前2m程から狭くなって70～80度の角度で立ち上がることも判明しており、土塁の敷き幅と礎石の奥行き方向の長さが同じであることから、門の構造と一体となった土塁の構築方法をうかがうことができる。礎石上には火災による柱の太さを示す焼け跡も確認できた。

二之門となる虎口は間口に対して奥行きの高い礎石配置という特徴があり、戦国時代の城門にみられる形態のひとつを示している。

韮崎市教育委員会並びに史跡新府城跡保存整備委員会では、発掘調査成果を基に、これまで二之門の建物復元を検討してきた。そこでは、①平入り横長形式の櫓門、②妻入り2階建ての櫓門、③1層の妻入り門の3つが復元案として出されたが、現時点では資料の制約等から門の復元案を決定することは慎重にすべきとの結論に至った。今後は、新府城跡の調査をはじめ他の城館跡の調査事例等、資料の蓄積をまわって建物復元の検討を進めることとした。

今回の整備事業は、発見された遺構を保護した上で、二之門跡に接する左右の土塁については現況遺構の保存を行い、発掘調査で確認された礎石及び地覆石は復元表示を行った。なお、埋設による遺構の保護を優先させたために、復元した門跡の礎石部分が櫓形全体から見ると実際よりは高くなっている。



二之門跡発掘調査平面図



二之門の礎石と炭化材（西側から）



二之門の礎石と柱の焼け跡の残る礎石



1層の妻入り門



妻入り2階建ての櫓門

二之門建物復元案模型
〔東京理科大学工学部建築学科伊藤勉久研究室作成〕

平成 28 年 2 月 文化庁・山梨県教育委員会・韮崎市教育委員会

これは土塁上で、二之門から一之門方向を見たところ/櫓形内部で折れをもっているのが見てとれる



同じく西堀よりの土塁上から一之門方向を見たところ/前方は七里岩の断崖絶壁となっている/一之門側より二之門側の土塁が高い



二之門を横から見たところ



そこから搦手の郭を見たところ



正面は西堀に沿って柵形虎口から延びる搦手の郭の土塁



その先、搦手の郭の土塁はこんな感じ



この平場が搦手の郭/西側から東方向に見たところ



そこから振り返って柵形虎口を見たところ



さて、ここから「二之丸」へと登って行く



途中左手には西堀からの堀の入り込みが見られる



こんな感じ



さて、暫く行くとこのような大きな窪地がある



井戸跡

本遺構は、調査前の上端の直径が32mある^{すりばち}播鉢状の大きな窪地で、発掘では現状の地表面から4mの深さになっても底に到達しなかった。七里岩台地の堅い地盤^{しちりいわ}を掘りくぼめ、浸み出した水や雨水を集める構造であったと思われる。井戸底まで螺旋状の通路が設けられる^{まいまい}巻巻井戸の可能性もあったが、その遺構を確認できていない。整備では、検出した井戸内側斜面を保護するために植栽(リュウノヒゲ等)し、見学通路として井戸の中に至る階段を北側に設けた。

なお、北西100mの帯郭にも井戸跡とみられる同様の形状の窪地がある。



整備前の様子



調査中の風景



整備直後の井戸跡

平成23年3月

文化庁・山梨県教育委員会・韮崎市教育委員会

こんな感じ



別の角度から



さて、更に登って行く/正面の上の方が「本丸」方向と思われる



右手に行くと「二之丸」/左手に下って行くと帯郭の方へ行くようだ



さて、「二之丸」が見えてきた



この平場が西側から見た「二之丸」/前方の土塁の向こうは本丸馬出しがあり、更にその先に「葎の構」、「本丸」がある



これは北側から見た「二之丸」で土塁の向こうには二之丸馬出しがある



「二之丸」西側の土塁上から南側の土塁を見たところ/左手を見ると土塁が切れており、ここが二之丸馬出しへの虎口となっている



西側の土塁上から南側の土塁に沿って東方向(「本丸」方向)を見たところ



ここが二之丸馬出しへの虎口となっている南側の土塁の切れ目



南側の土塁上からその虎口を見たところ/右手が「二之丸」で左手は二之丸馬出し



これが虎口から見た二之丸馬出しの平場



二之丸馬出し側から見た虎口と「二之丸」

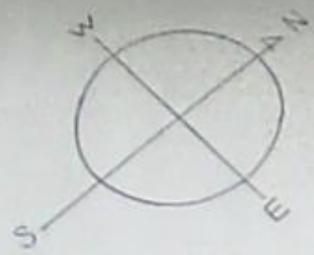


これは西側から見た本丸馬出しの平場への虎口/小口の先に見える土塁は本丸馬出し平場と「葎の構」との間にある土塁



さて、ここで次は最初の駐車場のある場所から南側に回って大手道から「三日月堀」→「丸馬出し」→「大手櫓形虎口」→「東三之丸」→「西三之丸」→「本丸」へと正面から登ってみよう





至長坂

本

植

込

丸

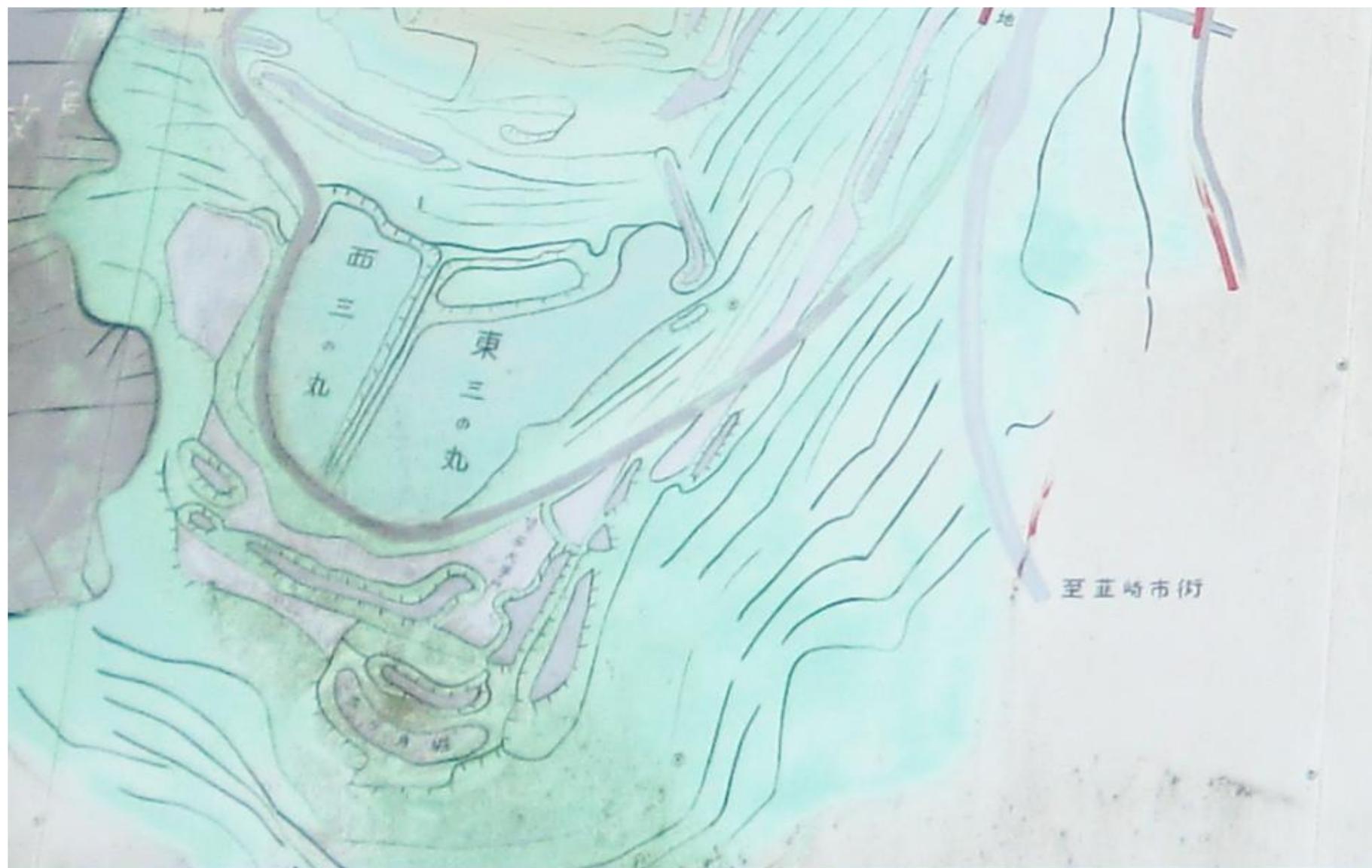
二の丸

福

帯

首洗池

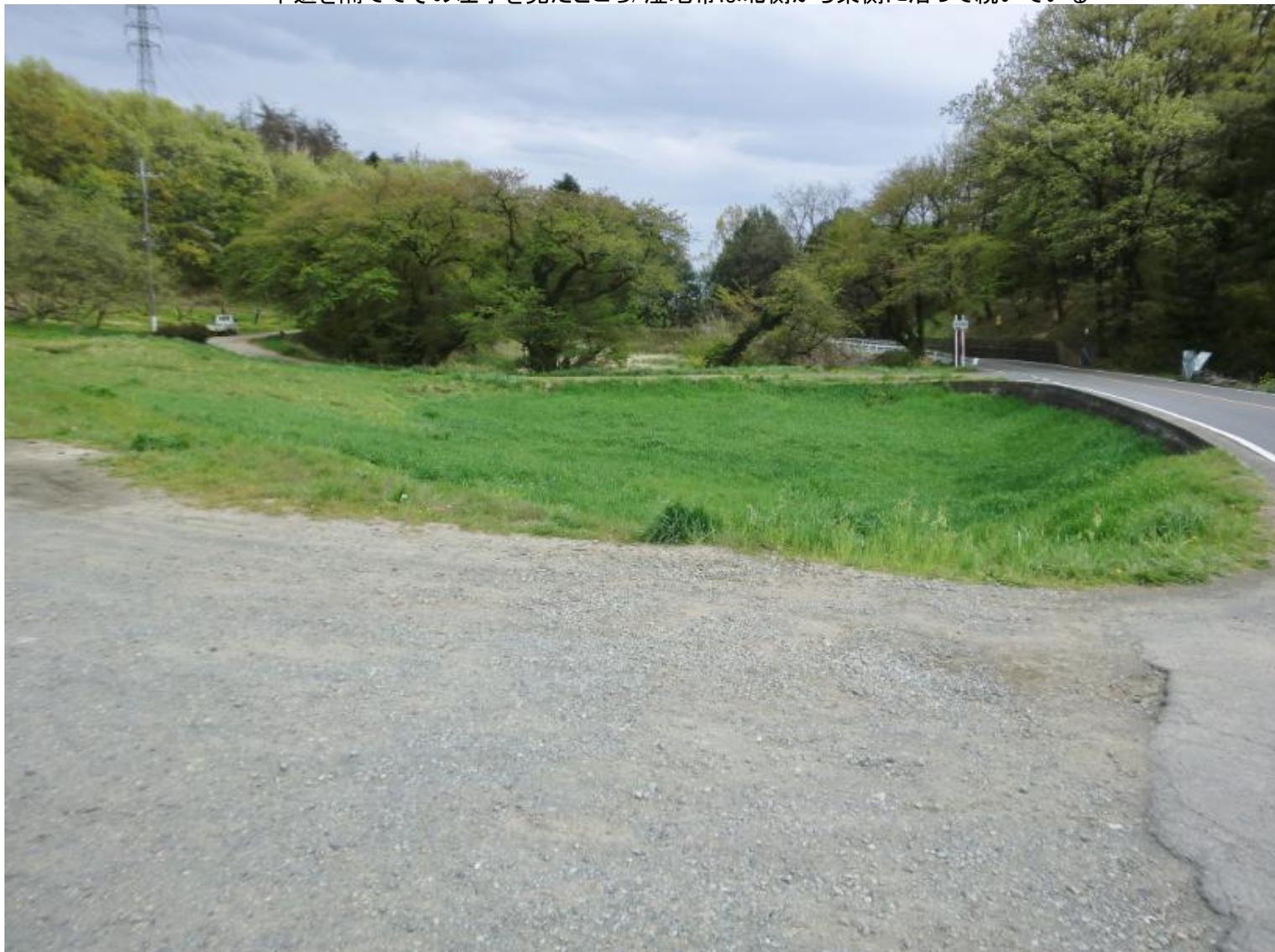
現在



まず、これは最初に見た「東出構」の左側を見たところ/湿地帯となっているがこちら側には堀は見つかっていないという



車道を隔ててその左手を見たところ/湿地帯は北側から東側に沿って続いている



こんな感じ



この辺りは「首洗池」か



さて、ここは車道から本丸に鎮座する藤武稻荷神社への参道/後世の改変





史跡

新府城跡

中段にある鳥居



左手を見たところ/平場が続いている



その先もこんな感じ/これは北側から東側に回り込んでいる帯郭らしい



さて、この先階段を登ると藤武稲荷神社へと至る



ここが藤武稻荷神社



さて、もう少し南側にある「本丸」への道路(後世の改変)から大手門へと行ってみよう





途中右手に平場がある



その先はこんな感じ



更に進むと先程の階段の中段にあった鳥居が見えてくる/この平場は帯郭のようだ/右下は車道



このようになっている



さて、元に戻り、後世に改変された道路を更に進むと左手に南大手門の表示が立っている



南大手門



* 大手馬出し

大手門の前に築かれた馬出しの跡である。馬出しというのは城門の前に築いて、人馬の出入りを敵に知られぬよう、また城の内部を見通せないようにした土手をいう。

馬出しは甲州流築城法の特徴の構である。

* 大手望楼台

物見などともいった展望台である。片山口ともいふ南方甲府盆地富士川河谷一帯を監視した場所である。

そこを左手に入っていくとこんな感じの平場になっている



「大手馬出し」なのだろうか



その先に進んでみる



右手を見上げたところ/この上には大手榊形虎口があるようだ



更に少し進んだところ/左手に傾斜して下がっている



その左手を見たところ/説明板の地図によるとこの辺りの下に「作事用陣屋」があったようだ



ここは「作事用陣屋」から大手門へと登って来たところで、ここに大手門があったようで、その先が「丸馬出し」の平場となっている



「作事用陣屋」から大手門への道や大手道から進んでくると「三日月堀」や「丸馬出し」が防御している様子が描かれている



これは大手門の辺りから下を見たところで、「三日月堀」が斜面右手に回り込んでいる



こんな感じ



「三日月堀」に雨の名残りが溜っている/右上は「丸馬出し」、左手は斜面となって下っている



右上の「丸馬出し」を見上げたところ



このように「三日月堀」は「丸馬出し」を取り巻くように続いている/左斜面下の大手道から進んでくるとこの辺りに辿り着くようだ



振り返って見たところ



「三日月堀」は新府城跡一番の見所という



右下の斜面を見たところ/この下から大手道が上がってくる



この先左上に大手門があったのだらう



ここがその左上/たぶん、この辺りが大手門跡か



ここは大手門の先の平場である「丸馬出し」/左下は「三日月堀」、右手は「大手榎形虎口」/東側から西方向に見たところ



西側から東方向に見た「丸馬出し」/左手は「大手櫛形虎口」、右下は「三日月堀」/正面向こうに大手門があった



右下の「三日月堀」を見たところ



その右手を見たところ



その左手を見たところ



これは「丸馬出し」から大手門跡を見たところ



さて、これは「丸馬出し」から「大手榎形虎口」を見たところ



これが「大手榎形虎口」/南側から見たところ



柵形から出たところはこの感じ/東方向を見たところ



反対に西方向を見たところ/右手に見えるのは後世に改変された道路でその更に右手は三之丸となっている



これは柵形の東側の土塁の上から「丸馬出し」を見たところ



こんな感じ



反対の西側の土塁を見たところ



これは柵形の西側の土塁の上から「丸馬出し」方向を見たところ



反対の東側の土塁を見たところ



前方は柵形虎口を出たところで、車道から登って来た後世に改変された道路が見える



その左手を見たところで後世に改変された道路の向こう側が三之丸



西方向を見たところ/左手が大手防楼台の辺りであろうか/右手に見えるのは後世に改変された道路



これは後世に改変された道路から柵形虎口を出たところを見たところ



アップで見る



さて、後世に改変された道路を少し登って行くと右手に三之丸がある



三之丸は土塁で二つに仕切られており、手前は「東三之丸」



これが「東三之丸」/左手から延びる土塁の向こうが「西三之丸」



これは三之丸を東西に仕切る土塁で手前は後世に改変された道路により破壊されてしまっている



その土塁上に登り、北方向を見たところ/右手が「東三之丸」、左手は「西三之丸」



「東三之丸」側を見たところ



こんな感じ



「西三之丸」側を見たところ



この仕切りの土塁は何のためだろうか



南側から北方向に「西三之丸」を見たところ



西側から東方向に「西三之丸」を見たところ



「西三之丸」の表示板がある/背後が「西三之丸」



さて、これは「西三之丸」を過ぎた辺りから「本丸」方向を見たところ



上記の写真は右下の「大手枳形虎口」から「東三之丸」、「西三之丸」と後世に改変された道路を進み本丸方向を見たところで、更に道路を進むと先に見た二之丸の馬出しが見えてくる



その二之丸の馬出しの表示板が立っている



ここが二之丸の馬出しの平場/右手の土塁の向こうが「二之丸」



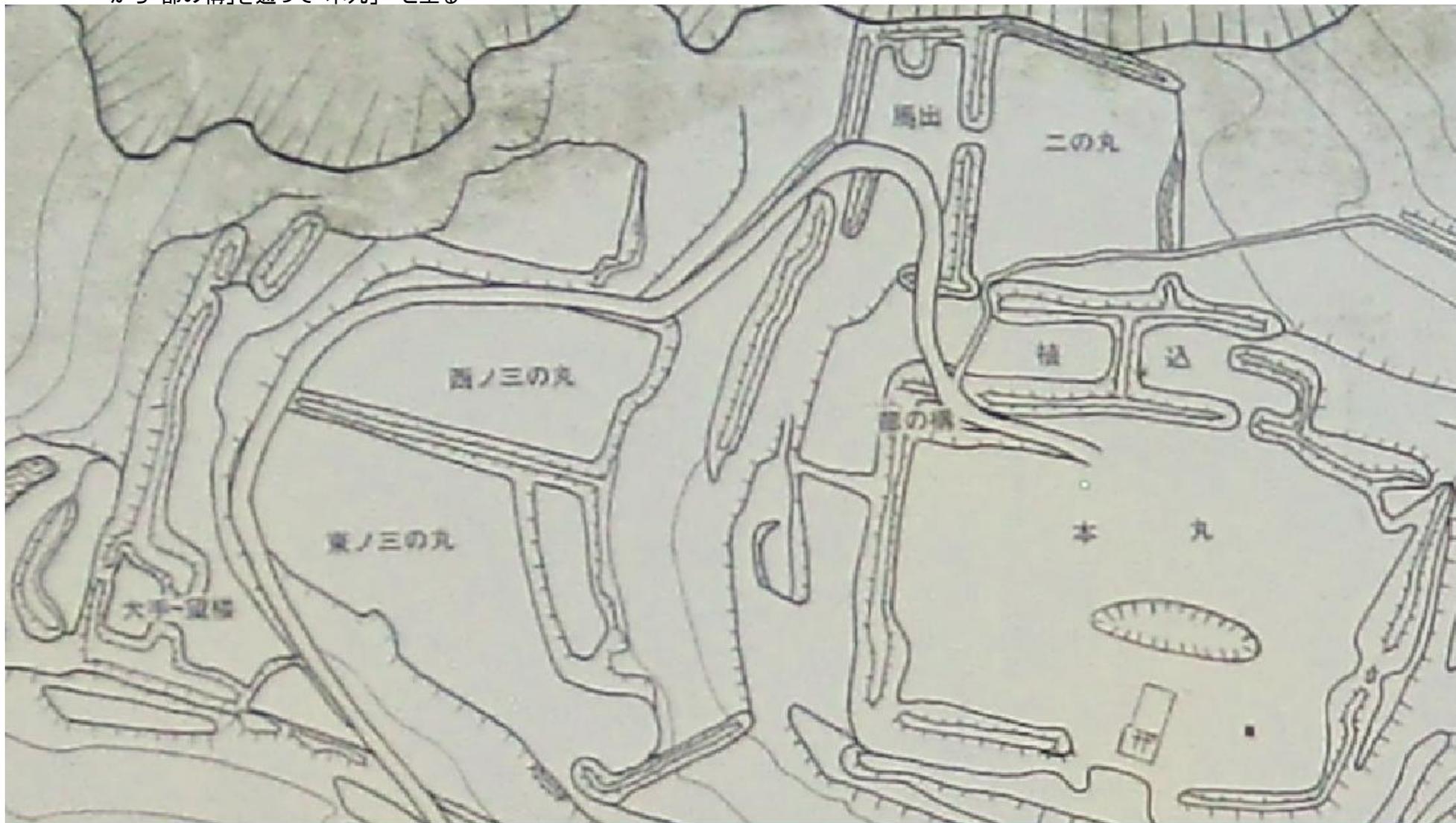
これは振り返って「本丸」の南側下に展開する腰曲輪を見たところ



更に後世に改変された道路を進む/正面前方は「本丸」、左手は「二之丸」/道路は「二之丸」の東側を破壊して「本丸」へと登る



後世に改変された道路は三之丸から二之丸馬出し付近を通り「二之丸」の土塁を破壊して本丸馬出しの平場(この図では植込と記されたエリア)から「葎の構」を通して「本丸」へと至る



前方は先に見た「二之丸」への虎口/その向こうが「二之丸」/本丸馬出しの平場から西方向を見たところ



虎口の先は「二之丸」



これは本丸馬出しの平場を南側から北方向へ見たところ/左手が「二之丸」、右手は「葎の構」、「本丸」



さて、後世に改変された道路は本丸馬出しの平場から「薮の構」を通り「本丸」へと至る/正面に見えるのは「本丸」にある公衆トイレ



ここが「本丸」/北東方向を見たところ/前方に標柱が立っている





東側から西方向を見たところ



南西方向を見たところ



その左手を見たところ/土塁が「本丸」を取り囲んでいる/南方向を見たところ



これは南側の土塁を東側から西方向に見たところ/左下には先ほど見た腰曲輪がある



こんな感じ



土塁は更に「本丸」を取り囲むように前方で右手に曲がって続いている/西方向を見たところ



これは南側から北方向を見たところ/前方の建物は藤武稲荷神社



これは西側から東方向を見たところ



「本丸」の西側に説明板が立っていた/左手前方には「本丸」の南側の土塁が見える/北側から南方向を見たところ



反対にその説明板を南側から北方向に見たところ



この辺りが「葎の構」のようだ



さて、「本丸」にはさまざまな説明板がある/右手は「本丸」に建つ藤武稻荷神社





国指定
史跡

新府城跡

昭和四十八年七月二十一日指定

新府城は、天正十年三月織田軍の侵攻を前に、武田勝頼自ら火を放って東方郡内領岩殿城を指して落ちていった武田家滅亡の歴史を伝える悲劇の城跡である。

本城は南北六〇メートル、東西五五〇メートル、外堀の水準と本丸の標高差八〇メートル。型式は平山城で、近世城郭のような石垣は用いず、高さ約二・五メートルの土塁を巡らしている。

最高所は本丸で、東西九〇メートル、南北一二〇メートル、本丸の西に葺の構を隔てて二の丸があり馬出しに続く。本丸の東に縮荷曲輪、二の丸を北方に下れば横矢掛りの防塁があり、その外側に堀を巡らしている。堀は北西から北、北東へと巡り、北方の高地からの敵襲に備えて十字砲火を浴びせるための堅固なニカ所の出構が築かれている。三の丸の

新府城跡概要図



南方には大手が開け望楼があり、三日月形の堀とその外側に馬出しの土塁が設けてある。本丸と東西三の丸、三の丸と大手等の間には帯曲輪、腰曲輪がある。搦手にも望楼がある。葺の構、出構は新府城の特色で防御のために工夫されたもので、特に出構は鉄砲のような新鋭兵器をもって敵の攻撃に対抗するために工夫された構えといわれる。

昭和六十年三月

文化庁
山梨県教育委員会
韮崎市教育委員会

正面の石碑は「本丸」の北側にある「甲斐国主武田氏四百年追遠の碑」



その石碑の背後はこのような土塁が続いている



これはそこから北方向を眺めたところで、前方に八ヶ岳が見える/その手前の低い山には武田方の能見城があったという



その左手を見たところ



こちらは右手を見たところ



さて、石碑の右手には「石祠・武田勝頼公魂社」がある





武田

石祠・武田勝頼公霊社

勝頼公霊社は、武田氏滅亡後当
地方民が国主の恩徳を追慕し新
府城守護神・藤武神社の北西の
地を相して石祠を建立し、勝頼
公の心霊を納め之を祀り勝頼神
社と称し 毎年卒去の当日は、
慰霊祭を執り行い「お新府さん
と呼び藤武神社とともに地元
民から親しまれてきた。
勝頼神社建立の時期は、貞亨、
元禄（一六八四年）の頃と言
い伝えられている。

平成十四年吉日

新府藤武神社氏子総代



その左右には長篠の戦いで戦死した将士を祀っている/「小塚 長篠役陣歿将士之墓」とある







「大塚 長篠役陣歿将士之墓」とある



こんな感じ



長篠の戦いで戦死した将士の分骨之碑らしい



そこから南方向を見たところ



さて、これは藤武稲荷神社/右手が拝殿、左手が本殿



拝殿



振り返ると車道から登ってくる参道の階段がある



拝殿(右手)前は平場となっており、このエリアが稲荷曲輪と呼ばれるところ/左手は参道の階段/北側から南方向に見たところ



この先、南方向へ平場が続いている



「本丸」南側の腰曲輪へと続いているようだ



更に先に進む



こんな感じ



左手を見たところ



右手を見たところ/この上は「本丸」



稻荷曲輪へ戻る



参考ホームページ

<http://jyokakuzukan.la.coocan.jp/011yamanashi/001shinpu/shinpu.html>

<http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Lake/4393/yamanasi/nirasakisi.htm>

<http://www.mapbinder.com/Map/Japan/Yamanashi/NirasakiShi/Shinpu/Shinpu.html>

<http://umoretakojo.jp/Shiro/TokaiKoshin/Yamanashi/Shinpu/>

<http://utsu02.fc2web.com/shiro56.html>

http://y-rinj.net/218_sinpujou.htm

<http://guide.travel.co.jp/article/15198/>

<http://www5f.biglobe.ne.jp/~shingen/joukanyamanasi/sinpu/sinpu.html>

<http://tabi-and-everyday.com/archives/1033>

<http://www.pcpulab.mydns.jp/main/shinpujyo.htm>

http://rekishi.tokyo/ruo_yamanasi/nirasaki/20141011_3.html

<http://www.zephyr.dti.ne.jp/bushi/siseki/shinpujo.htm>

